

# たかさご史話 49

## 近世都市高砂の繁栄(2) 高砂の漁業

港湾都市としての高砂では、の町中として塩鯛一〇枚を歳暮として献上する習わしがありました。それは姫路藩から高砂に対して漁業権が認められていたことへの謝礼の意味がありました。それとは別に、毎年、高砂漁師から塩鯛四二〇枚、塩鯖一〇〇本、干鰹三〇〇本を献上する替わりに、それぞれ銀三三六匁、一五〇匁、一〇匁五分が上納されてきました。それは本来は漁師たちが漁業権を認められることに対する役負担的な献上物であったものが、安永二年の段階ではすでに代銀納となっており、営業税的な性格に変わっていたと考えられます。また網を用いる漁業に対して、営業鑑札が発行されており、こち網札二七枚、立網札一枚、狩網札一枚、地引き網札三枚、沖鴨取札四枚についてそれぞれ運上銀五四匁、三匁三分、二分、二四匁、二〇匁が上納されています。その他に川漁師から一〇〇匁五分、魚問屋から二貫一五〇匁の運上銀が納められています。播磨灘の海域には備前や摂津からも漁師が入り込みますので、姫路藩としては高砂、飾磨を始めとする領内漁村の漁師を保護するとともに、領外への漁獲物の販売を制限して城下町姫路を中心に領内の食料資源を確保する政策を採っていたと言えるでしょう。

(市史編さん専門委員長今井修平)

世帯二〇二人、一一一世帯四三五人、六八世帯二九六人が住んでいました。漁船の数からいえばその大部分が漁業で生活していたと言えるでしょう。そのほかにも魚町九一世帯三四一人がありました。その全てでは無いでしょうが魚問屋や生魚や塩干魚を加工・販売する商人が多く住んでいたと思われる。

姫路藩主が参勤交替で国元に在住している年には高砂

の町中として塩鯛一〇枚を歳暮として献上する習わしがありました。それは姫路藩から高砂に対して漁業権が認められていたことへの謝礼の意味がありました。それとは別に、毎年、高砂漁師から塩鯛四二〇枚、塩鯖一〇〇本、干鰹三〇〇本を献上する替わりに、それぞれ銀三三六匁、一五〇匁、一〇匁五分が上納されてきました。それは本来は漁師たちが漁業権を認められることに対する役負担的な献上物であったものが、安永二年の段階ではすでに代銀納となっており、営業税的な性格に変わっていたと考えられます。また網を用いる漁業に対して、営業鑑札が発行されており、こち網札二七枚、立網札一枚、狩網札一枚、地引き網札三枚、沖鴨取札四枚についてそれぞれ運上銀五四匁、三匁



『日本山海名産図会』より「高砂名産飯蛸」